涙を忘れさせた友情

安永　多恵子

私の友人のKさんの周りで起きた、とても優しい話を紹介します。ただちょっと残念なのは、その周りの人達の中に私自身が参加していないことです。

ある静かな港町で火事がありました。建てられてまだ十年ほどしかたっていない民家が全焼しました。家族四人が焼け出されてしまったのです。とても悲しく寂しい事故でした。原因は全く分からないということでした。火事に遭ったAさんから、Kさんのもとへ電話がかかりました。それがお昼頃だったのです。とても切羽つまった興奮したAさんの声が、受話器から飛び込んできました。「火事なの！私の家が火事なの（なくなったの、何もかもなくなったの！）」。そんな感じだったろうと思います。

Kさんは電話を切ってすぐ動き出しました。目の前に電話機を置き、片っ端からかけ始めました。Aさんの状況を手短に説明し、地元の情報に詳しいBさんには「Aさんの住める家を探して」、Aさんの子供より年上の子供がいるCさんには、教科書、参考書、制服の古くなった物を集めてもらいました。それからスーパーの薬局に行って「友人が火事に遭って困っています。化粧品や薬のサンプルをいただけませんか」と頼んだら、薬局の方も奥からいろいろ持ってきてくださったのだそうです。そのほか洗濯機、冷蔵庫、掃除機、炊飯器、電子レンジ、家具類、食器類、衣類、米、野菜、現金のカンパも。なんと、その日のうちに生活に必要な物のほとんどをみんなでそろえてしまったのです。その日の夕方、新しく住むことになった家で、多勢の仲間達がAさんを囲んでワーワーと大騒ぎだったそうです。皆で「絶対泣かないようにしよう」と約束していたそうです。

翌日、少し火傷をしているAさんを病院に連れていったKさんに、Aさんが言いました。「ちょっと泣いていい？」って。初めてAさんは思いっきり泣いたのです。でもAさんは、家をなくして悲しかった涙だけではないと思います。みんなの気持ちがしみた涙でもあったと思います。

次の日、KさんがAさんに「何か足りない物ない？」って聞いたそうです。Aさんは「英語の辞書ぐらいかな」って答えたそうです。その後、Aさんのために立ち上がった仲間達は、次の作業に取りかかっていました。それは、新しいアルバム作りでした。家族の思い出がたくさん詰まったアルバムも焼失してしまったAさん家族のために、Aさんの家族が写っているネガを持ち寄り、アルバム作りに知恵を出し合っています。

Aさんに本当の笑顔が戻る日も、そう遠くないと思います。

『心にしみるいい話第二集』（長崎新聞社）より